

木下牧子委嘱新作『タラマイカ偽書残闕』

東混第258回定期演奏会

加藤良一 令和4年(2022)3月8日

木下牧子さんから、5年ぶりの5編からなる混声合唱曲を東混の定演で発表するとのご案内を直前になって受け取った。たまたま所要で会場へ行けず、今回はオンラインで視聴した。

今回の作品は、谷川俊太郎さんの詩『タラマイカ偽書残闕』を題材にした、2021年度の新作委嘱である。東混は「東混マスク」着用、指揮者とピアニストはマスクなしだった。東混はアンコールのあと、最後の一瞬だけマスクを外した。東混マスクは色や柄に様々なバリエーションがあり、せめてものおしゃれを楽しんでいた。

2022年3月5日(土) LIVE配信で視聴

会場 杉並公会堂 大ホール

指揮：大井剛史

ピアノ：齋木ユリ

オルガン：浅井美紀

合唱：東京混声合唱団

◆プログラム

・一つのメルヘン 作曲 江村玲子 / 作詩 中原中也

・海の不思議 作曲 平吉毅州 / 作詩 川崎 洋

・2021年度新作委嘱作品

「タラマイカ偽書残闕」 作曲 木下牧子 / 作詩：谷川俊太郎

・ミサ曲ニ長調 Op.86 作曲 A.ドヴォルザーク

タラマイカ偽書残闕

『タラマイカ偽書残闕』は、谷川俊太郎48歳のときの作品。詩的実験といわれているほど一風変わった詩である。残闕とは、書物などの、一部分が欠けて不完全な状態を指す。

スウェーデン北部、ギジンにいたというタラマイカという少数民族の口承文学の断片が書かれたノートのような紙切れと、ある日谷川俊太郎が出会ったところから、この詩集は創作された。スウェーデン語から英語へ、英語から日本語へと谷川さんが翻訳したという。書き出しは以下のように入る。

『「これから私の語る言葉が、正確にどこから来たものか私は知らない」と、その老船長は言った。“もう半世紀も昔のことになるが、たまたま乗り合わせたナポリからポンペイに向うおんぼろ貨

物船の、予備のティーポットを包んだ故紙に、これらの言葉はスウェーデン語で記されていた。北部ギジン、タラマイカ族より採集という、短い註がつけられていただけで、何の説明もなかったその叙事詩とも箴言ともつかぬものを、私がいつの間にかそらで覚えてしまったのは、久しぶりに出会った母国語がなつかしかったからだろう。航海が終ってポンペイに着いた時には、その数枚の紙片を私は紛失してしまっていたが、私の記憶に刻み込まれた言葉だけは、五十年後の今日も、こうして生きていて、私はそれをまるで私自身の発した言葉であるかのように親しみ深く感じる”

(中略)

彼の言によれば、ウルドゥ語で記されたその巻紙状の断片を、米国西海岸の或る中都市の工事現場で拾ったということだ。新しい都市計画に従って取り壊し中の図書館の現場の、ブルドーザーのキャタピラのしたにあつたと彼は称しているが、その現物はと問うと、ヒッチハイク中に他の荷物と共に盗まれたというばかりで要領を得ない。(中略)とにかく人間の魂から発したものであることに違いはない。学会からの万一の誤解を未然に避けるべく、ひとまず偽書としたが、それがこれらの言葉を否定するものでないのは、言うまでもなからう。

冒頭から“これから私の語る言葉が、正確にどこから来たものか私は知らない”などと言われてしまうと、これはいったいなんなのだろうか、まったくの創作なのか、何がはじまるのか、心もとなく不得要領な詩である。さらに、『「< で始まることも、どこからどこまで読めばよいのか、先行きの不安を感じさせるものである。

I (そこそこ) から、XI (何も無いところから湧く知恵) まで11篇の詩で構成されている。

わたしの心はゆきつもどりつ わたしの心はゆきつもどりつ	黙す。 ここに	口は わたしの	(中略) 行った。	遠くへ 耳が わたしの	開く。 ここに	口は わたしの	行った。 遠くへ 眼が わたし ¹ の	I (そこそこ)
--------------------------------	------------	------------	--------------	-------------------	------------	------------	---	----------



冒頭の「わたし」の注釈1は、この一人称は、単なる一個人としてのわたしではなく、この語りもの=書きものに参加した人々、すなわちタラマイカ族の語部から始まり、途中の翻訳者、そして最後の谷川俊太郎に至るまでの複数の「わたし」の重層体であるという。

(前略) 人と人との間では
 すべてに形あれ
 すべてにつぐないあれ
 けれど
 人と空の間にはただ

詩の末尾が突然の中断で終わってしまう。まさに「^{ざんけつ}残闕」である。これは残欠とも書く。
注釈20は、この突然の中断は、言うまでもなく故意になされたものではない、と説明しているが、この詩は、不可思議な詩である。全篇とおして含意が多く、注意深く読み進めないとならない。

木下さんは、作曲にあたり「反復の多いシンプルで力強いテキストには、感嘆詞やオノマトペが効果的に使用されていて、ある意味言葉に縛られず自由に作曲することができた。東混に合った骨太の作品に仕上がったと思っている」と述べている。

オノマトペには、「アギラハナミジャクラムジン」「ハビトウム テム チャ」「ミリルギジジ クキュ チ」「オオマ ノオオヤ コオオオザガ」「ササザ ザザジ フィフィルウ」「ぐるぐるまわる まわるる まわわるる」があり、感嘆詞には「おお」「アーハ」が出てくる。

[Back](#)

「音楽／合唱」TOPへ戻る

[Home](#)

「ホームページ」表紙へ戻る